

「土器からわかること」を聴いて

聴講日：H29.9.2
むきばんだやよい塾第18期

弥生土器とは

考古学の基本は土器研究から始まります。なぜなら土器は考古資料として一番たくさん出土するからです。土から作られた土器は、脆くて壊れ易いので、壊れる度に何度も作り返されます。そして長い時間の中で作り返される度に少しずつ変化していきます。だからその変化の様子を分析すると出土した土器の作られた順番を決定していくことができます。考古資料としての土器は時間軸を設定する上で重要なポイントになるのです。

土器の用途としては、煮沸用、貯蔵用、供膳用などが挙げられます。土器の口の部分を口縁部と呼びます。その他の部分の呼び方として頸部、胴部、そして底部があります。また弥生土器の主要構成としては壺、甕、鉢、高坏(供膳用)、壺を安定させるための器台などになります。考古学で甕は水を貯める用途ではなく煮炊きを使う土器を甕と呼んでいます。甕は現代の鍋であり煮沸用具です。壺は貯蔵用具で、縄文土器は基本的には煮沸用具ですが、弥生時代になって壺形土器が現れます。

土器研究の手法としては形、大小、色合い、土の様子(ザラザラしているかツルツルしているか)、そこに書かれている模様(模様の効果を狙って付けるものとそうでないもの)があります。

ヘラでつけられた模様、ときどきは貝殻のぎざぎざを文様効果として使います。一本一本を線引きするとその間隔は様々ですが、櫛描模様と言われるものは間隔が一定のものです。この櫛を使って書かれた模様は弥生時代の前期にはなく、中期から始まります。中期でも櫛描文が流行る地域と流行らない地域があります。それ以外にも流水文と言われる水の流れを表現する模様は関西地域でのみ流行る模様です。

山陰の土器には鳥のスタンプ文があります。木の端に鳥の形を彫り出して土器の表面にスタンプするように模様をつけます。スタンプ文には渦巻き文や流水文などがありますが、文様には地域色があり山陰の弥生後期の土器には鳥形がスタンプ文で付けられています。鳥形スタンプ文は伯耆地方のオリジナルの文様です。独自性の強い文様なので、他の地域からこの文様が出土するとその地域が伯耆地方とのつながりを示すものと理解されています。

弥生土器は粘土の紐を上積みして作ります。目に付きやすい土器の外側は丁寧につなぎ目を分らないようにしてありますが、手が届き難く目にすることのない内側にはつなぎ目の痕跡が観察されます。そのつなぎ方には二通りあって、中から外に貼り足していく方法と外から中に貼り足していく方法です。外から中へ貼り足す方法はごく一時的に現れます。縄文土器は中から外に貼り足す内傾と呼ばれる継ぎ方で作られますが、弥生時代の初めの頃にごく一部の土器に外から中に貼り足す外傾方法が各地域で同時流行ります。ほぼ同時期に韓国でも同じ方法が現れます。非常に短い時間に出現する現象なのですが、いろんな地域の技法、技術情報を考えさせる大事な要素になります。

二重口縁は山陰の特許みたいなもので、山陰で始まってすぐ瀬戸内でも始まり、三世紀終わり頃には全国的に流行します。

高坏のお皿の部分は底を埋め込んで作られています。近畿地域ではお皿の部分と足を別々に作って結合させる高坏が流行りますが、これはお皿の部分と足を一体で作った後にお皿の底を充填する方法で作られています。後半に減少しますが、五世紀の土師器の中にもこの方法の高坏があります。韓国の倭系土器の中にも同じ作り方の高坏があり、畿内地域では少ないので韓国でこれらの土器を作っていた人たちが日本列島のどの地域の人たちと結びつきを持っていたかを知る参考になります。

刷毛目とは現在イメージする刷毛ではなく厳密に言うと板目のことです。木材で土器を撫でていくと年輪と年輪の間は柔らかくて磨り減り、年輪の部分だけが筋状に残るので、その板の筋状の痕跡が刷毛で撫でたような文様になるので刷毛目と呼んでいます。

粘土に含まれている空気を抜くために木に溝をつけてものでたたいてできた文様をたたき目といいます。粘土を密着させる目的で行います。

へらけずりとは土器を薄くするために土器の壁土を板目でこそぎ落とすことを言います。削ったままのものはへらけずりですが、磨いて表面をなだらかにしたものをへら磨きといいます。土器表面を整えていく手法ですが、たたきなどをするときは土器が凹まないように内側から手を当ててたたきます。

弥生中期からは内側も削ってつなぎ目をなくします。これらの手法は山陰と瀬戸内のみで行われ、九州と畿内の土器には見られない手法です。

時期ごと、地域ごとの土器の特徴

レジメでは時期ごとに九州・山陰・瀬戸内・畿内の順番で各地の土器をまとめていますが、話の順番は地域ごとに各時代の土器をまとめています。

弥生土器は九州で定着、成立して東に伝播、瀬戸内経由で畿内に伝播し、また山口から日本海岸沿いにも伝播します。弥生土器が近畿から影響を受けて作られたのというのは間違いで、西から東への伝播が正しいです。畿内の弥生前期の上限はBC6～5世紀で九州と比べて200年くらい遅く、AMS測定からも検証されています。

山陰で始まる弥生土器は九州の二段階目の土器の影響を受けていて、それは瀬戸内も同じです。頸部に細い櫛目模様があり、次の段階には土器は斜めの波状文が付きまします。そして中期後半にはへらけずりと刷毛目がくびれの部分につくようになります。口縁部に凹線(へらで沈線を書いた後で引っ搔かれた粘土を濡れた布で拭き取り凸凹を滑らかにした文様)が付きまします。二重口縁は山陰起源で、瀬戸内や山陰の土器は内面を削って非常に薄く作るのが特徴です。

この地域の土器がベースになって畿内地域の弥生土器が成立します。九州から直接でなく瀬戸内などを經由して畿内に伝わります。横書きの凹線文が入りますが山陰に比べて少ないのが瀬戸内の特徴です。またへらがきの文様が入るのも特徴です。山陰と瀬戸内で弥生後期に入って大きな差が付くのは高坏と器台と壺の形です。大きな器台が流行ってきます。さらにお墓用に特別に作られるようになり、何百年後に埴輪に変化していきます。埴輪の祖形はこの瀬戸内の大型器台なのです。

畿内には縄文晩期に土器の内面を削ったものがあり、その名残が前期の甕に残している。中期になると甕以外の容器に流水文をつけるようになります。畿内には絵画土器が多く、簾状文(同じ模様を引きながら押さえてつける)が畿内の独特の櫛描文です。後期には形も単純化して機能的になります。平野部で大きな集落が形成されず分散して丘上に集落を形成されるからで、丘上の土器は良好な状態で残らないためと思われる。

弥生前期及び中期の九州、山陰、瀬戸内、畿内の土器をまとめました。このように同時代の各地域の土器を並べてみると各地域がそれぞれ独特でとても同じ文化圏の土器と認められないように思います。

土器編年の先には

土器の研究は編年の時間のものさしとして普遍的で初歩的で大切ですが、編年だけで終わってしまうのは寂しいです。今回見てきたようにこんなに土器の顔が違って弥生時代と言う一つの時代、一つの文化で括って、一つの集団としての文化発展と捉えてその中の地域差、個人差みたい形での地域差として捉えようと言うのが日本考古学の弥生時代研究です。例えば、同じような形で同じエリアくらいでもっと小さな範囲で異文化の共存をみているのは韓国です。韓国では後に新羅、百済、伽耶、或いは高句麗という三つの国の時代があったことになっています。その三国になる前には伽耶の地域が大伽耶、小伽耶があり、馬韓がありたくさんの文化があったことでそれだけの多様な文化の共存を認めた中で、三国に別れ、統一新羅で全体が一つの国になったと理解しています。ところが日本考古学はなぜか初めから一つの国なんです。確かに北海道や沖縄は違うといいますが、同じ日本史の中で殆ど触れられることがありません。そして北海道や沖縄を除く弥生時代を一つの文化として、一つの国として、国単位の一文化としての議論にし

て、その中の地域色という形で解釈してしまうことはおかしいと思います。各地域の本来は違う展開があったのではないかと考えます。それをとにかく一つの皇統譜にまとめようとしたのが例えば日本書紀であって、いくつかの国、いくつかの文化要素を一つの王朝、一つの王権の元で起きた現象にしてしまっていると思います。今回は土器の違いだけを見てきましたが、鉄器や青銅器、さらには鏡も。或いは銅剣、銅鐸でもいいです。これらも重ね合わせてみていくとさらに顕著になります。例えば鏡で言えば、弥生時代の中期には九州にしかありません。九州以外の弥生中期の各地域には鏡なんてありません。鏡が瀬戸内に入ってくるのは後期になってからですが、お墓の副葬品の道具としてではありません。生活の中で使うお守りみたいな用途で入ってきていて、それは山陰も畿内も同じです。それなのに畿内には九州と同じ鏡の文化があると解釈し、いきなり卑弥呼の鏡がヤマトに現れることになってしまうのは、木に竹を継ぐような解釈になっているのではないかと心配しています。このような違いがいつどのような形で克服されていくのか、統一化、単一化されていくのかを細かく経緯を見ていかないといけないと思います。